

會



報

1961年8月

216

日本山岳会

富士山南面の勝地

冠 松次郎

十里木を中心として、富士山の南面を探るのはなかなか興味がある。私は終戦前この辺を大分歩いた。最近にも幾度か訪れた。

十里木から富士山に向って、広漠とした裾野を、カヤトを過ぎ、植林地帯を抜けると、富士山の原始林の帯の中に入る。そこには寄

生火山が幾つも集まっていた、その間は高原のような広い平になっている。樺、檜、榎、杉、樺などの喬木と、樺、檜、楓、白樺などの大木が交錯して美事な森林となっている。

浅黄塚、腰切塚、水が塚、西黒塚、東日塚などが、美しい林に包まれて盛れ上っている。皆一、四五百米の峯である。

×

終戦前に御料（帝室林野局）では、この原始林地帯を貫ぬく道を造った。御殿場口の馬返しから富士の宮口の一合まで、トラックの往復できるような幅の広い水平道である。原始林を伐り出すためのものであるが、今のところ原始林に大体そのままになっている。

御殿場からハイヤーでこの道を一時間位で水が塚まで行ける。水が塚には営林署の事務所兼宿舎があつて頼めば泊めてくれる。宿泊料も安く、設備が整つていて居心地がよい。

水が塚は須山村の水源地で水は豊富に湧き出ている。この付近は小鳥の囀りがことによく、新緑もまたよい。水が塚からよく道を教わって十里木の方へ出ることもよいし、なおこのトラック道を富士の宮口の方へたどるもよい。

×

原始林の地域を抜けると駿河方面のお庭に出る。お庭には落葉松が多く、その林の下にはコケモモと蘚苔で埋められ、富士山特有の美しい巨岩が風致をそえている。前庭の方は平だが、奥庭の方はゆるい傾斜となつてゐる。この二つを御殿庭と言つてゐる。

行く手に近く富士山の頂を仰ぎ顧みると駿河湾一帯の海景が眺められる。近くは愛鷹山、箱根火山遠くは伊豆の山々、大島などが縹渺としてゐる。さらに上つて宝永山の第三火口へ上ると、ここにも

広い平が展べられてゐる。火口とは言え、ゆるい大斜面の立派な高原で、落葉松が美しく、コケモモが繁殖してゐる。

お庭から第三火口にわたり新緑時には落葉松の浅黄色が滴るよう若葉をのべ、小鳥の囀りがすばらしい、お山からは淡霧が香ばしい匂いをして静かに下つてくる。秋には金茶色の紅葉の下に、赤い顔をすずなりにしたコケモモ（富士のハマナシ）が足のふみどころもないように地づらをうれてゐる。うっかり手を出そうものなら一時間や二時間はコケモモの実に吸いつけられる。ここから宝永山に登って御殿場口の七合目に出られる

元村山からくる旧村山口の道はこのお庭と谷溝を隔てて美しい尾根を延ばしてゐる。村山口の一ノ木戸だ。日本アルプスあたりの尾根のように背筋を落葉松と白樺が気持よく並び、シャクナゲ、アセビ、ドウダンなどが下草となり、厚い苔の中をコケモモが延びてゐる。

×

一合、二合、三合と僅かな距離だが、実に美しい尾根で、お庭との間の日沢の溝へ下りると、この尾根の先の礫岩の大斜面の上に、富士山は大堡壘のように見える。すばらしい眺めである。

富士山の南面は一度は探るべき処である。

本号主要目次

- ・富士山南面の勝地……………一
- ・ネパールとダーシリン……………二
- ・札幌の楨さん……………四
- ・会員有志閑談会の記……………五
- ・水晶岳から忍が岡まで……………六
- ・氷河の堆石を求めて……………六
- ・混勿山の話……………八
- ・「会津の山々・尾瀬」を……………八
- 読んで……………ハ
- ◆会員通信……………一〇
- 春の丸山岳と会津朝日岳……………一〇
- 岩苔小谷と鏡平……………一〇
- グリンデルワルド便り……………一〇
- 奈良短信……………一〇
- ◆第二一三回小集会……………一〇
- 南極・ニュージランド……………一〇
- 各隊歓迎会……………一〇
- ◆第二一四回小集会……………二一
- ◆図書紹介……………二二
- ・大阪市立大学合同歩……………二四
- ・大島修司君のこと……………二四
- ◆会務報告……………二四
- ・全国支部長会議……………二六
- ◆支部報告……………二七
- ・ペルー・アンデス通信……………二九
- ・ブカヒルカとワスカラン……………二九
- カイヤンガテ……………二九

故ガルトゥエンのための募金にご協力下さい

ネパールとダーズリン

日 高 信 六 郎



△その一▽

ネパールへ

去年の十月下旬のこと、ニューデリーを朝早く立ったネパール航空公社のダコタ機は、はじめ真東を向いてガンジス流域の平野を見おろしていたのが、ネパール国境に近ずいてはるかに雪嶺が見えはじめる頃、すすめられて操縦席に移った。

はじめは遠くガルワルの山なみつづいてアビ山群の三峯が見えて来る。脚下にネパールカンジの町と飛行場を見て東北にむかい谷を遡ると、漸くダウラギリ連峰が近くなつていかつい主峰が白雲の上に聳だつ、山なみを越えて北がわの谷をくだりボカラに近ずくと、アンナプルナ連峰がマチャプチャリの尖峰の左右にひろがり、さらにマナスル三山のわれらに親しみ深い峻峰が、真昼に近くなつて立

ち昇りはじめた白雲のかたに隠れて、すばらしい大観を展開する。ガネッシュだランタンだと指さす間もなく、カトマンズの盆地に入った機は機首を下げて旋回しはじめた。

われわれ五人はネパールの電力開発の調査に派遣されたのだから先方のお役人に迎えられてコロネーションホテルに落ちついた。私は技術者諸君が大車輪で調べものや立案に取り組んでいる間をぬけ出して、先ず足をのぼしたのはカカニの丘であった。

今西君の踏査隊らしい、多くの山仲間のとを追うのであるが、今はトリスリバザールの水電工事のために開かれた新道を、神原達君の案内でジープを走らせ、二時間峠についた。

この路も雨期には土砂崩れがひどいそう。澄みきった秋空のもと、そよ風に吹かれ丘の芝生の上に弁当をひろげ、白雲の上に聳えるガネッシュヒマールの姿を飽かず眺めて過ごしたときは忘れられることが出来ない。まことにこの頃は空が晴れて氣候もよく、山を

眺めるには絶好の季節である。郊外の小高いところからは勿論、ホテルの屋上からでも飛行場からでも、こんなに沢山ヒマラヤの高峰が見えるとは知らなかった。

まず河谷の概念をつかむ為の飛行機を出してもらい、二日にわたってあちこちたんねんに見てまわった。初日は中部地方を選び、針路を南にとってカトマンズからインドへの路に沿って飛んだ。

村山君がマナスルの帰りに荷物を輸送して通った山みちや、荷物を運んだケーブルが急坂にかかっているのが見える。地形や河谷を観察するのが主だから高度を五百米ぐらいに取り、必要な地点では

グルグル廻りながら飛ぶのだからいささか目まぐるしい。カリガンダキにマルシャンディが合流するあたりをおもに調査することにしたのでこの辺を入念にまわった。機はけわしい谷のなかにはいって

阿がわの絶壁が窓をかすめるかと思ふと、谷がひろけてのどかな田園風景が展開したりする。その間にも目をあげてマナスルからアンナプルナにかけて高峰を眺めることが出来た。印度に近い地方を見るとジャングルや湿原や平地が広がっている。途中着陸した川辺のバートプールや国境のバイラワで

は、ガラガラとまぶしい日光やその下に駆け集る群集などインドと変りがないようだ。

私が帰ったあと、このカリ川の地点に来て二十日近く実測に従事した技術者たちは、昼間はワニが甲良をほす急流に丸木舟を掉さし夜はテントのまわりをうろつくトラを寄せつけぬ為の焚火をたやさぬ苦勞をなめたという。

国境から北上して、山上にタンシンの村を見おろし、山を越えてボカラに着いた。飛行場に新らしく建った小屋でおそい昼飯をすませ、近くの湖水に工事のダムを見に行く。

この日同乗した当国在住十年のトニー・ハーゲン博士と並んで歩く。白雲がわき昇ってアンナプルナ連峰を隠し、ひとり尖峰をあらわすマチャプチャリがすばらしい「君の国のマッターホルンの第二世だ」と指さしてみせると「高さがくらべものにならない」と首をすくめて笑う。このスイス生れの登山家は曾てこの奥で日本隊と出くわして交歓したとき山口、高木両君から思いがけなくスイスマりの独乙語で話しかけられた驚きと喜びをくりかえして両君をなつかしむのであった。

翌日は東に飛んだ。カトマンズ

の谷を出ると間もなく、はるかに一きわ目立つガウリサンカールから東につづくすばらしい山なみが天際を限って、メルンツェからローツェまで、やがてエヴェレストが前山のかげから現われて白いジェット雲を東になびかせ、サウスコルが真白くその右下に見える。今日もハーゲン君と席をならべて山や谷の説明を聞いたり、ダム予定地の地質を教わったりした。

前日以来同乗している神原君はさかんに長焦点のカメラを駆使している。まず南に飛んで新らしく開られた二つの飛行場に着陸したり、電力開発予定地の上を飛んだりしたのち、東に向い国境に沿ってコシの広い荒れた流れを渡りビラトナガルで中食する。

この町はネパール第二の都である。ダーズリンからカトマンズに出で日本隊に加わるシェルパたちはこまめに汽車で来るのであり、カルカッタからカンチエンジュンガに向うときの順路にもあたる。機はこれから東部国境に近いムシコラの谷をのぼって、カンチエンジュンガから発するタムールコシの谷に入り、西に下って本流のアルンコシに向った。

東部ネパールのほうが雨量が多いことはジャングルや山地の林相を見てわかる。ところどころ松

の疎林しかない赤ちゃけたはげ山
つづきは地味がやせているせいで
とハーゲン君が説明する。

山のうえにダンゲタの町を望む
ころ、そのかなたに群がる白雲に
まぎれてカンチュンジュンガの広
くいかつい姿を見出した。その左
にはジャヌーが突兀と雲の上にそ
びえる。アルンコシに合するところ
には西からスンコシが合流し、
絶壁にかこまれた大十字峽となっ
て壮絶な景をあらわす。アルンは
チベットから出てエヴェレストの
東を流れ下る大河だが、発電予定
地があるのでだいぶ上手まで川
筋をのぼった。絶壁、段丘、激流、
深淵、懸垂谷など目まぐるしくう
つり変って応接に暇がない。北を
見るとマカールのほうが乱雲の間
から望まれる。

◇ヒマラヤ殿下の来朝

ネパール国王の次弟、ヒマ
ラヤ殿下は妃殿下及び母皇太
后等家族づれで五月非公式に
来朝された。

日高会長は六月六日、御宿
舎のホテル、ニュートキョ
ーでお目にかかり、ご挨拶す
ると共に「山岳」第五十四号
と第五十五号を献呈した。

はじめの予定では十字峽まで戻
り、スンコシの谷を伝って帰るこ
とになっていたが、支流のダッ
トコシを横切る頃にはクンブの谷
やらエヴェレストなどを間近に眺
められると張り切っていたのだが
米国人の押かけ客や、次官級のお
えらがたの家族づれなどの同乗者
があらわれ、往航でへばってピラ
トナガールに残った婦人子供を拾
うために同地まで戻りそこからカ
トマンズに直行したのは惜しかっ
た。

しかし相当の高度をとった上に
夕方になくなって雲が収まり、
澄みきった碧空を背景にクッキリ
とつぶろツエ、エヴェレストか
らガウリサンカール、ジュガール
ヒマールからランタンリルン、そ
の間に顔を出すゴサインタンの凄
味を帯びた岩峰などを心ゆくまで
眺め入ることが出来たのはありが
たかった。カトマンズに戻ったと
きは日が没したが、最後まで落日
をうけて淡紅色にてり映えるラン
タンのピラミッドは今も眼底に残
っている。

その後は市内や郊外のお寺を訪
ねたり、東北にあたる山手のスン
ダリジャル発電所と小さなダム
のところまで登ったり、都のそばを
流れるバグマチ川の下流チヨパー
ルの峡谷までドライブしたり、英

国訪問から帰られる国王御一行を
飛行場に迎えて正装の高官達や色
とりどりに着かざった婦人たちの
間にまぎったり、日本来遊のとき
日本山岳会でもおもてなしをした
皇弟のヒマラヤ、バスンガラ面殿
下を訪ねたり、アジア競技大会の
とき監督として来朝し本会員と交
歓したナラ中将と旧交をあため
たりする一方、外務省に登山担当
のNMシン次官補を訪ねて今年度
登山隊のことやシェルパについて
懇談したり、わがマナスル遠征の
当初から変らぬ好意をよせるカイ
ザー元老帥に敬意を表し快く迎え
られたり、三田隊いらい世話にな
ったシャハ氏や、息子さんを慶応
隊のリエイゾン・オフィサーに出
し、自分の持ち家に一行をとめて
呉れた外務省のPMシン儀典長と
話したり、ビヤナ君その他の若い
人たちに会ったり、山に縁のある
人々との交歓は楽しく有益であっ
た。

△その二▽

◇ダージリンへ

かくて現地調査の計画がきまっ
たので、ジープで出かける団員を
見送った二日あとの午後、往路と
同じ空路をとり、今はなじみ深く
なった山と谷に名残りを惜しみな
がらネパールを去った。

用事が済んだらまっすぐ帰るつ
もりだったのが、ヒマラヤの魅力
には勝てず、とうとうダージリン
に寄ることになり、おまけにカリ
ンボンまでまわりみちをする破目
になってしまった。

夜おそくカルカッタについた翌
日の早朝ダムダム飛行場から飛び
出した。丁度日本から来合わせた
鉄鋼関係の視察団が借切った飛行
機に乗せてもらえたのは幸運であ
った。暑そうなモヤがかかったベ
ンガル平野を北に飛び、ガンジス
河を過ぎる。

カンチが見え出しますからと操
縦席から誘われて、立派な顔立ち
のパイロットと並んで坐ると、す
でに山は行く手はるか雲の上に見
えている。間もなくその左にエヴ
レストの姿があらわれる。そろ
そろ着陸する頃と思つて席に帰る
と間もなく、その先を一まわりす
るからと、またパイロットからお

迎えが来た。チスタの谷からカリ
ンボンの上を飛び、左に旋回して
ダージリンをかすめ、一まわりし
てバグドグラに着陸した。乱雲が
湧いてカンチは隠れていたが、思
いがけない景物に驚喜した。

シェルパの運転手とならんでオ
ースチンの小型車を駆り、シリグ
リから山にかけてダージリンに
向う。

超狭軌の汽車と並行し、曲りく
ねってつけたみちはいかにも英人
の仕わざらしく、自然にさからわ
ず、自然を傷けず、のんびりと行
く観光客には持って来いである。
カーセオンの村に近づくにつれて
霧がはじめて膚さむく、ゲームで
濃霧、ぐるりとまわってむこう側
の斜面にかかると霧が晴れ、木立
の丘を埋めるダージリンの家々
のかなた、雲を抜いて高くまばゆ
く、わがカンチュンジュンガがド
ッシリと鎮坐しているではない



<カット説明>

ネパール・インド教の神像
石井 鶴三



石井 鶴三

か。

ダージリンの二日は忙しく楽しく過ぎた。マウント・エヴェレスト・ホテルに泊った翌朝は四時半ごろからランドローバーに乗ってタイガーヒルに出かけ、コンクリート造りの展望台の上に宿のお仕着せの毛布を被り、目白押しにならんでふるえながら日の出を待つ雲があったが日の出はすばらしく、谷を埋める雲の上に幻のように泛んだカンチエンジュンガ連峰が淡紅色から純白へと目ざめて行く。時がたつにつれて雲が収まり山の姿が浮き上って来る。その左にかすかに頭を見せたエヴェレストは間もなく雲にかくされてしまった。やがて近くの雲はすっかり散って、ダージリンの丘からゲーム、さらにネパール境のスキヤボクリ辺まで手にとる様に見える、せめてあの辺まで足をのびし度いと遊志がムラムラと起こる。私はみ

んな立ち去った後も一時間あまりねばって、この大観を独占したって一人で悦に入った。

宿に帰り朝食をすませて登山学校を訪ねた。校長のギャンシン準将はボンベイへ、教頭格のテンジンは上級生を率いてシッキムヒマラヤへ（カンチ遠征の準備訓練らしい）何れも留守だったが、人のよさそうな男が丁寧に迎え、親切に案内してくれた。ここは当地名所の一つになって訪客が多く、博物館やシュルパの細君たちが経営する茶店が繁昌している。博物館では二階まで吹きぬきのホール中央にヒマラヤの大模型を飾り、まわりの硝子棚にはテンジンがエヴェレスト登頂に用いた装備一式をはじめ、各国山岳会の記章や会旗その他写真標本類がならべてあるわが山岳会のベナントも飾ってあった。

いい所に校長の公舎、さらに上手に前記の茶店がある。道案内かたがた小童にボニーの口を取らせてガルツェンを訪ねた。彼はホテルに私を訪ねる用意をしていたところだったが、細君や子供たちともどもにこやかに迎えてくれた。居間いっぱい日本みやげや写真などわれわれに縁のふかいものがどっさり、話題も共通のものばかり、楽しいひとときであった。故ニマ・テンジンの未亡人は元気でいるとのこと、霊前に花を供えることを引受けてもらった。

彼はその晩手土産をもってホルに訪ねて来て長いこと話し込んで行った。

◆国際アルピニスト大会◆

フランス山岳連盟主催の国際アルピニスト集会は、昨年（会報二〇四、二〇六号記事参照）同様、シャモニーで七月十七日から八月十五日まで開かれる。

本会からも会員二名参加方五月十日付同会長から招待があったが、七月十三日に手紙を受取った関係もあり、本年は残念ながら派遣を見合わせる旨返事をした。（日高記）

彼とテンジンとの微妙な関係、

日本隊ことにわが山岳会に対する彼の愛着、ネパールヒマラヤ登山に伴う各般の問題に関する彼の考え、その他いろいろ打開けた話しをして呉れ、大いに参考になった

その翌日は早朝からまたオースチンのご厄介になって、はじめは密林、後は広大な茶園のそばを、チスタの谷まで六千呎ちかくの尾根をまっしぐらに下った。

天気は絶好、始終カンチをチスタの支流ランギット谷のむこうに仰ぐ。チベット人の夫婦が鈴をひひかせ、山羊を追って下るのに遭った。避難民らしく、こんな姿をあちこちで見かけた。チスタ橋畔のチェックポイントでは時節柄神経をとがらせているのが感じられた。そこからさらにカリンボンまで四千呎の気持のいいみちを往復し、谷の奥はるかにシッキムの高峯を望んで、思いを連山のかなたに馳せた。

それから川に沿って下り、また暑いバグドクラに戻って午後の飛行機をつかまえ、夕飯前にカルカッタに帰りついた。翌朝のジェット機は夜おそく羽田について、この思いがけない観山旅行の幕を閉じた。

札・幌・の

槇・さ・ん

望月 達夫

函館から札幌へ移ってきた会員藤平正夫君とオロフレ山へ行った日は、霧と雨にたたられたが、あくる日の五月二十二日に槇さんが岩波の講演旅行で札幌へ見えたときは、五月晴れのまことによいお天気だった。平素の心がけで、こゝろ違うものかと、槇さんに改めて敬意を表した。

札幌での講演をおえた翌日会員山崎春雄博士を病床に見舞い、小樽、旭川、帯広などでの講演を予定通り終って、札幌へ戻って来られたのが二十七日の土曜日、会員山崎英雄君の案内で植物園を訪れたり、たまたま札幌で開催中の坂本直行氏の展覧会を見た後、午後は北大山の会、山岳部の人々と話し合うひとときを持たれた。それが終る頃を見はからって集った藤井、藤平、望月に、伊藤秀氏直行さんも誘い出して夕食を共にし歓談に時のたつのも忘れた。

※

會員有志閑談会の記

とかく山登りをする種族は顔を合せて、愚にもつかぬおしゃべりをを楽しむ習性をもっているようである。それが狭い範囲の仲間だといふよりよがりのお山の大将ばかりになって始末がわるい。

幸いにもJACのように、齢八十の大先輩から二十代三十代の会員まで抱擁しているところで、有志相計って閑談を交えれば、お山の大将など出来っこない。それだけにたのしさもまた格別である。

戦前はこういった会合の通知も「会報」に載ったものだが、戦後は一々往復ハガキ。会場の収容人数約三十名とあっては、世話人の

みつくりい有意を集めることになる。世話人が変れば、見繕いもおのずから変わるであろう。

次回の世話人（交野武一、織内信彦、加藤泰安）どんな面々をかきあつめるか。

当日の模様はクダクダ書くまでもない。出席者の顔ぶれをみれば大体想像がつくというものである。

昭和三十六年六月廿四日、駒込六義園心泉亭の集り出席者氏名、
鳥山、冠、田部重、近藤茂、楨、
深田、日高、金坂、松方、松本熊
牧野衛、織内、岡壁徳、佐藤久、
佐藤隆、瀬名、高木菊、網倉、山
崎安、古沢、山下一、岩永信、神
谷、交野、加藤泰、松本善、野口
山本朋、堀田弥、林和、藤島、関
根、太田敬。以上三十三名

（藤島敏男記）

（追記）この集りには、JAC会員の誰でも参会歓迎である。たゞ世話人だけでは万遍なく気をくばりきれないから、こんな集りに出てみようかという会員は、次回世話人へ遠慮なく申出られることを望む。



神谷 公 米沢 高 三郎
近藤 茂 吉 七
岩永 信 雄 六十五
田部 重 治 七十八
松方 三 郎 五十三
松本 熊 牧 五十三
松本 善 五十三
加藤 泰 安 五十三
深田 五十八
山崎 安 五十八
古沢 五十八
網倉 五十八
林 和 五十八
堀田 五十八
関根 五十八
太田 五十八

1961年6月24日
有志閑談会
六義園
心泉亭

—会場スナップ・牧野 衛—

※

二十八日（日）は藻岩の山頂からの見晴しをたのしみ、昼は月寒の原っぱにしつらえた成吉思汗料理におさそいした。

集る者、加納一郎、犬飼哲夫、館脇操、藤井運平、相川修、藤平正夫、山崎英雄、本多勝一、木村勝久、岡本文夫、望月達夫の十一名。

この日も空は美しく晴れて、手稲から札幌、空沼、恵庭などの山を望み、カッコーの声をききながらの野外料理は、まことに札幌ならではの催しで、榎さんも終始悦にいつておられた。

午後おそく石狩河口までドライブし、帰路再び山崎博士を見舞い翌二十九日の朝、雨の札幌に別れて函館へ向われた。

その後榎さんは八甲田山へ行かれたが、それには東京から佐藤久一朗氏ら、札幌から藤井君が参加したので、定めしお山の空気が大分に違ったことだろうが、同行の機を逸した私は、残念ながら知るよしもない。



一窓一

上田 哲 農

忍が岡まで

水晶岳から

氷河の堆石を
求めて
☆

辻村 太郎

地震学者のミルンは初めて月山で、洪積期氷河の存在を認めた人だそうであるが、私の師匠である山崎直方先生は、ウィーン大学で有名なアルブレヒト・ペンクに学び、帰朝した翌年の明治三十五年に、白馬岳で氷河の遺跡を発見した。

私は立山に登った明治四十三年、紅顔の一高生徒であった青年時代から、七十を超えた白頭翁になる今日まで、ずい分長い年月のあいだ、氷河地形や氷河地質の研究者というよりも、多分に批評家であったし、鑑賞の態度で終始して来た。

この間に発表された先人の議論を手短かに

に記すと、山崎さんは飛騨山脈の各所に、カールと堆石の地形を、白馬岳の惣平で羊背岩を見出して、氷期における雪線の高さを二五〇〇メートル以上と考えた。

同じくベルリン大学でペンクの教を受けた東京高等師範学校の大関久五郎教授は、大正三年から七年までの観察にもとづいて、槍・穂高の連峯と立山その他に、谷氷河の存在をみとめ、槍沢と横尾谷および岳沢、黒部の支谷東沢と立山の真砂谷や劔谷を、U字形の横断面を示す氷蝕谷であると断定した。

今では湯川秀樹さんの父として知られる、京都大学の小川琢治博士が、八ヶ岳の裾野など一〇〇〇メートル内外の高度をもった土地に、氷河堆石が分布すると主張したのは、山崎さんが亡くなって間もない大正五、六年以後のことである。

大関説は私などを少数の例外として、ほとんど黙殺の形であったし、小川さんのいわゆる低位置氷河説は、非常な反対を受けている。私は至って優柔不断であり、今までどっちつかずに日和見つづけていた状態である。

ここでとりあえず私の結論を述べると、谷氷河の存在は、谷底における堆石物質によって完全に証明される。それは氷蝕による条痕を示す岩石片、「ゲクリッツテ・ゲシーベ」である。以下、「ゲク・ゲシ」の略字を使用することにする。

私は立山（昭三二）、白馬岳（昭三三）、槍ヶ岳（昭三四）、水晶岳（昭三五）において、その多数を見つけた。これらの谷氷河より、もっと低い位置に、氷河作用が行われたことは、八ヶ岳山麓その他における、氷河河流堆積物、——氷河から出る川で運ばれたゲク・ゲシを含む、——の存在によって知られる。

後に記すように、昭和三十六年の夏から冬にかけて、そのような性質を示すゲク・ゲシは、秩父山地の麓で最初に発見され、ついで尾瀬の景鶴山と至仏山の下に見出され、谷川岳の下でも意外に低い所まで分布することが判明した。かくして小川説に対する疑問も、肯定的解決の曙光を見るに至ったのである。

三〇〇〇メートルに近い日本アルプスの高山のみでなく、二〇〇〇メートル級の本州の山地にも氷河があったらしく、八ヶ岳火山では確かに氷河作用が行われ、おそろく白山でも氷河が形成されたであろう。

会津駒ヶ岳の外に、朝日岳と飯豊山など越後山地の高峰、北上山地の早池峰のように、ハイマツが生えている山頂には、小形の氷河が発達していたと推測して差支えないと思われる。

さて次には、先ず第一に私がなめた苦い経験と、おろかな失敗を白状しなければならぬ。

明治四十二年には白馬岳の山頂附近で、ゲク・ゲシを見つけたが、断層の研磨面でもあろうかと思つて、目を外らしてしまつたことがある。次に昭和七年に仙丈岳の鉾沢カールで、堆石堤の上にあるゲク・ゲシを見たのに、その重要な意味に気がつかず、昭和十七年には薬師岳のカール底で羊背岩を認めながら、ゲク・ゲシを探そうとしなかった。

昭和三十年に富士登山をした際にも、吉田口の登路で、玄武岩のゲク・ゲシを拾つたが、重いので置きざりにし、三十二年には白山の室堂上部で、みごとな角閃安山岩のゲク・ゲシを見ながら、昭和南山の擦痕岩面を連想して、臆病風に吹かれてしまった。

立派なゲク・ゲシを採集することが出来たのは、昭和三十一年に記念碑建設の準備で行った立山の剣沢カールで、それは遭難した石井逸太郎君の亡霊に導かれた観がある。

白馬尻の端堆石堤が明らかにわたつたのは、武田博士がとられた写真のお蔭である。昭和三十三年の夏、ここに一泊して、雪溪にのぞむ崖面から、実に美しい蛇紋岩塊を持ち帰ったが、重さ10kgをこえるその石は、私の秘蔵品になっている。その翌年は槍ヶ岳に登つて、槍沢の氷蝕谷底で、ひん岩（安山岩）や石英斑岩のゲク・

ゲシを沢山みつけた。そして去年(三十五年)の夏は水晶岳に登って、黒部川源流の水蝕谷で、安山岩や花崗岩のゲク・ゲシを採集し、湯俣晴嵐荘うらの段丘から、雲母片岩や花崗岩のゲク・ゲシを探し出したのである。

私が文化財と水力電気の問題で尾瀬原に行き、安山岩と花崗岩のゲク・ゲシを見つけたのは十月の半ばであったが、間もなく水晶岳の同行者大角留吉君が、土合駅に近い段丘から、閃緑岩のゲク・ゲシを採集した。つづいて瑞牆山の下から花崗岩、笛吹川や千曲川の上流から水成岩のゲク・ゲシが見つかり、秩父山地に氷河があったことは、疑いをいれない事実となった。清里駅に近い段丘からは、八ヶ岳の角閃安山岩がみごとにゲク・ゲシの形になって出てきたのである。

その中に、事件は文字どおり急転直下して、立派なゲク・ゲシが、東京都下の武蔵野台地から出るという、飛んでもないことが持ちあがった。

事のはじまりは、小宅から一〇〇メートルぐらいいきりない、東大弥生門ぎわの大学出版会建築工事場で、武蔵野ローマとして知られる火山噴出物の赤土から、漆のように光った小石が出てきたことである。

ある日工員の一人が赤土の崖から、みごとな氷河の傷をもった粘板岩の小塊を取って呉れたが、このときには家に持ちかえる、さっそく葡萄酒の祝盃をあげた。

次にはすぐ上の旧浅野邸で、弥生式土器の原産地、工学部の臨界未満装置室の工事場と、医学部の建築場所から、秩父山地の岩石で、みごとにゲク・ゲシの特色を示すものが続々と出てきた。

果報は寝て待て、であるが、これは、十

＜ゲク・ゲシ＞
写生図



二月末の朝七時前の仕事だから、霜で固く土に凍りついたところを、もぎ離す手は冷たかった。しかし石を入れた紙袋を小脇にかかえて、坂道を下りようとする、朝日の光が、新しい理学部三号館の天文観測ドームを照らし、遠くにある大型構造物試験室の白壁はモルゲン・ロートの色になる。

長いこと厄介になった大講堂の時計台を眺めて、隠居仕事をするのも好い心もちであった。

今年の三月から四月にかけては、上野公園竹ノ台の噴水工事場で、実にみごとに大のゲク・ゲシを採集することができた。この中には向が岡では見なかった石灰岩の美しい礫もあって、紡錘形に磨かれた石は、マナスル氷河で川喜田さんが取ってきたと呉れた標本にそっくりである。

チャートの岩片で三つくらいの方角に交る条線を見せるのもあった。茶褐色の火成岩で、削かけた鑿節のように、片面だけきれいに磨かれたものさもある。一ばん多いのは、粘板岩の細片を含んだ硬砂岩のゲク・ゲシである。

面白いのは、富士山の火山礫と思われる、赤い熔岩片が附着したゲク・ゲシを、少なからず発見したことである。おそらく水期に大噴火が起って、赤熱状態になった噴出物が多量に落下し、氷雪をとかして洪水を現わしたのである。そのありさまは、アイスランドの氷河で知られたヨークルラウプに似たものであるし、アーノルド・ハイムが記したアンデス氷河のように、端堆石ダムの決壊による氾濫でもあろう。

こういう特殊な原因による火山氷河泥流によって、かなり大型な堆石物質も、その原形をそこなわれることなしに、秩父の山頂から一〇〇キロメートル近くあるところまで、割合短かい時間で運ばれたのではな

高井戸の広びろした日大工事場で、雲雀の声を聞きながら、石を探したのは、五月なかばの頃のことである。

ここでは、今まで見なかった閃緑岩のゲク・ゲシがかなり多かった。径一五センチぐらいの円盤状になった、灰白色の美しい砂岩片もある。きれいな筋が縦横に規則正しく並んだ、ハート型の愛すべき閃緑岩塊も拾った。

中でも一ばんの傑作は、流線型の長楕円体になった、五〇センチ大の閃緑岩塊であって、酸化鉄で美しい茶色に染まった表面には交叉する条線がきれいな模様を描いている。大菩薩峠に近い山から流れて来たのであろうか。

これこそ一昨年の槍沢で見ず、去年は、東沢で期待して、遂に得られなかった石そのものである。

新宿駅から外濠にそって、弥生町の自宅に急ぐ車の中で、明るい国鉄電車が走るのを提灯行列のような心地で見ながら、思いがけない戦利品を獲得した幸を、独りひそかに祝うのであった。(三六、六)

八月一日から三日、八ヶ岳に行きました。予想以上に氷河作用が大きく、清里口附近にも、八ヶ岳農場までの道でも氷河礫のみごとなを沢山とりました。富士吉田口六合目からも立派な擦痕岩片がでた次第で、いずれつづきを書きたいと思っています。(筆者)



混勿^{コナ}山の話

藤島敏男

一九五九年十月両神山御座山、十一月五郎山天狗山男山、一九六〇年一月鶏頂山、二月子持山小野子山十二ヶ岳、三月山王峠尾頭峠、五月七ヶ岳荒海山、六月聖岳、七月木曾駒ヶ岳空木岳、九月白砂山佐武流山苗場山、十月横尾山、十月白峰三山、十一月高見石崎山蓼科山車山、十二月武尊山（深雪不登）、一九六一年一月七面山八紘嶺上十枚山、二月御前山三頭山、三月四阿山、五月武尊山、六月焼石岳。

「会報」二〇六号に避衆登山という短信を寄稿したことがある。繰返すまでもないが、なるべく人に会わないような山に登ろうというのである。昨今そんな山があるのか、といわれるかもしれないが、根気よく山を探し、季節をえらび、連休を避け、といった手間をかければ、衆に押しまわれないで、静かにたのしく登れる山は、この日本国にまだまだたくさんある。

山をさがすにはガイドブックや山文雑誌の××特輯などを参考にはならない。そういうものに頼るのは、飛んで灯に入る夏の虫になることである。地図を睨んで、オヤこんな山があるが、どこから登るのだろう、地図には道はないが、この山にこの方面から登るのは、面白そうだ、といった具合である。季節としては「夏山は招く」ときなど、山にソッポを向いている心構へが肝要。飛び石連休とやらいう訳の分らぬときも、警戒を要する。つまりなんでもないうちに余り登山者の口の端に上らぬような山へ、夜行日帰りなどもっての外、少し長い日程を組んで出かけるというのがコツである。

× × ×
こういう戦法で、二〇六号所載以降、僕の歩いたところは、

× 本会々員なら百も承知の筈の山ばかりだが、世の中ではあまり人気がないのか、時期がよかったのか、いつの場合でも僕たちは衆に煩わされることなく、楽しいかぎりであった。これらの山々はピトン、ハーケンその他片仮名の道具など一切不要、標高も北岳の三一九二米が最高で大したことではない。行をともにした仲間には、ヒマラヤを知っているのも、若い頃はドコかのバットレスの初登はんをやったものもあるが、誰もがこれらの山々に登って、大いによこんだのである。日本の山で相当年季を入れ、海外の山も知っている仲間が楽しかったというのだから、これは決して僕のひとりよがりではない。つまり穂高や劔や谷川岳のように衆の集るところのほかに、好ましい山があるということだ。

× × ×
こうして僕が気軽に山へ出かけるのを「老先き短かい」とみて、大分いそいでるね」と評する人もあるが、大変見当がいてある。JACの創立者のひとり、武田久吉先輩が或る席で「元気ですね」の言葉に、「これが当り前で、そうじゃないのは、どうかしているのだ」と応じられたのを思い出す。武田先輩と僕は十何年のひらき☆

川崎隆章編

「会津の山々・尾瀬」

を読んで

三田幸夫

終戦直後、檜枝岐へ一家疎開したというほどの川崎君のことだから、尾瀬や会津の山々への執着、郷愁ぶりは一寸他に類のない仁である。それだけに、編者の川崎君としては、本書に対しては大変な愛情を傾けたと思われる内容の節々が窺われる。

執筆者としては、川崎君を含めて二十人近くの人が名を連ねているが、中には数名の本会会員の人の名前も見られる。いずれも、この方面の山々に詳しい人達に違いないと思うが、紀行・伝説・民話的なもの等も集めて、肩をこらせることなく、この辺の山や谷、峠、部落の模様等を伝えてくれる。

目次を見ると、会津、尾瀬周辺の珍らしい山々が幾つも目につく。本会員の中でも、その山名の大半を聞いた事もないという人の方が多いことと思う。それらの山の名前を知っていても、登ったことのある人は極めて少ないだろう。僕自身も、この辺の山々には曾て異常な関心をもったものの一人だが、今更こんなに沢山珍らしい山々が会津にあるとは知らなかった。

二千メートル以上の山は二十二ほど数えられるが、その中で、平ヶ岳、越後と会津の両駒ヶ岳、至仏、燧、等はかなり知られて

ているが、他はあまり知られてもいないし、登られることも甚だ少ないだろう。筆者も大正九年に田代山、帝釈山、台倉高山、孫兵衛山、黒岩山と、この辺では高い二千メートル峰を連ねた山稜を歩いたが、交通不便の当時のことだし、夏山でもあったし、ひどい藪でかなり難儀をした。現在では黒岩新道とかが出来て、大分便利になったようだが、田代山以外には余り登られてないようだ。

× × ×
二千メートル以下になると、前述したように珍らしい山がやたらにある。その色々な山が沢山本書に紹介されている。地図を拡げて、そんな山がどこにあるのか探し出すのにも一寸間諒つく。それだけに人にもあまり知られず、少々臍まがりな、藤島敏男君一派の所謂、避衆登山家たちに温存されていた、昨今流行の「秘境」、「日本のチベット」的な存在と言えるかも知れない。が、檜枝岐の丸屋の前までバスが行くという今日である、アプローチの容易さは昔の比ではない。本書の紹介で、丹沢山的な繁昌ぶりになられてもという余計な心配もある。

本書の終りの方に「南会津の峠表」がある。その四十六の峠について、簡単ながら親切な註釈が附記されている。

一番高い峠は、檜枝岐から鬼怒川の川俣へ通じる引馬峠で、一八九六、五メートルとある。僕も前述の旅の折、この峠にあった小さな樵夫の飯小舎に泊ったが、寂しい奥山の峠らしい峠であった。その名の示すとおり、昔は馬を曳いた旅人の往還だったのだらうが、今はあまり通る人もないようだ。

この表にあるように、南会津には部落

冷があり、老先きまだまだ長いといわねばなるまい。

×

×

×

ところが敢えてひろく世間と言わず、山登りの社会でも、この「どうかしてる」の中々少くないようだ。学窓を出るとトタンに山から遠ざかるのなどは、若気のいたりか、流行の尻馬にのったのか、否応なしに引張り上げられたのか、ともかく本当に山が好きで山登りをしていたのでないことだけは確かで、どうかしてるの筆頭だろう。気兼ね思惑にウロウロする社会生活に疲れてはたり、世帯やつれに消耗しついたりして、山から離れるのも、心掛け次第で、やはりどうかしてるの部類に入る。暇がないなどは逃口上で、所詮は山に対する熱がないからのこと。八十才近い高齢で今夏は、白砂山から苗場山へ抜けようという、武田先輩に比べると、どうかしてるのが余りにも多すぎる。

幸いにも僕はまだ「どうかしてる」の部に属しないので、大いに山登りをしているが、いゝ相棒をたくさんもっていることも僕の大きな幸はせのひとつだ。前記の山行をともした山仲間を挙げてみよう。

榎井昭吉、伊倉剛三、深田久弥、川喜田壮太郎、村尾金二、望月達夫、名須川浩、加藤泰安、青木昇、山下一夫、佐藤テル、野口末延の諸氏。

この中の二三人と仲間をつくっては出かけたのだが、いつまでも心にあるような山登りばかりであった。みんな僕よりはやや、或は遙かに年少なので、学生時代からの交友である筈はない。僕は若い頃からナントカ大OBとやらいう、ヒモだかカラだかを一度も身につけたおぼえがなく、所属は日本山岳会一本槍。JACのメンバー

シップよりナントカ大OBの肩書の方が大切な面々からみれば、無籍者みたいであるが、その代はりにJACで実に多くの山友達を得る幸運にめぐまれた。前記の諸氏の外にも山中苦楽とともにするほどの親しい間柄の山仲間はまだまだあるが、みな同じくJACの会員だからであり、そこにクラブというもののよさがあるのだとおもう。JACは○大OBだけが会員ではない。大などという不景気なものを経験しない会員だつて沢山いる。そこへOB風を持たんでは、クラブの雰囲気は損はれようというものだ。近年JACの講習会講師、新任理事などの氏名のもとに、時々OBという字をみるが、戦前には余り見かけないこと、会員何某で通用するし、OBを附加しても値打がある訳でもあるまいから、これはやめた方がいい。

×

×

×

×

人気がない流行らない山もたのしいこと。山登りは長く息のつきくべきものであること、日本山岳会はあくまでクラブであるべきことを「こんな山の話」と題して綴ったこの一文、会報ならば没書にもなるまい。

(三十六年七月記)



カット・川喜田壮太郎

と部落を結ぶ小さな峠が沢山ある。荒れたものも、いままお村人の利用する静かな可愛い峠もある。その峠の一つ一つを辿っての会津の山脈の味は格別のものである。そのいくつかの峠の記述も本書の中に紹介されている。

×

×

×

×

僕は会津の旅から帰って、自分が味わった小さな峠の好きについて話した時、特にそういった峠に関心を持っていた大島亮吉が眼を輝かしていたことを思い出す。

彼の峠を書いた名文の中に会津の峠を見出せないのは残念である。もっとも、彼が穂高で死ぬ前、低い山を大分歩いてたから、或は会津の山々に惹かれて彼らしい峠から峠への旅をいく度が試みていたかも知れない。そうだとしたら、未だ残っている彼の彼の遺稿の中に何かあの辺の峠に就ての優れた記述が発見できるかも知れない。

×

×

×

×

戦前の晩秋の或る日、僕は頼さんと二人で、尾瀬から鬼怒沼山を越えて八丁の湯へ下りた。

×

×

×

×

人っ子一人行きあわず、紅葉は真盛り、鬼怒沼はしんと静まりかえって、まことに会津の山奥らしい恵まれた山の旅であった。下りに新雪が降ったが、八丁の湯の露天風呂に温まってはとした。宿の幼児の乳がきれて困っていたが、僕の持参した煉乳が役に立って嬉しかったことを思い出す。

会津にはそういったひなびた湯宿がまだ沢山残っていることだろう。それに道も大分開けた今日、少しバス道から離れた峠を越え、奥まった温泉の湯につかる楽しみが年とった登山者を迎えてくれるに違いない。

僕はいま、附録の地図を掲げ、まだ知らない、しかし面白そうな山や峠、温泉等の色鉛筆で印をつけ、小さな旅のプランを色々と頭の中に描いている。そして本書の、それに関連した紀行を読みながら、その旅の楽しさを想像している。が、矢張り、僕としてはもう一度銀山平を訪ねてみたい。

檜枝岐から会津駒に登り、大津峠から只見川に下りよう。鷹ノ巣平には星清四郎がまだ生きているだろう。螢の飛びかう夜、小舎の外でたいくつした風呂は素晴らしい。娘さん共々打ってくれたそばの味も忘れられない。四十年ぶりの再会が楽しみだ。清水の近くには富永重太郎が小舎を持っていた筈だ。七十を遙かに越えた彼には先年越後の小出で会う機会を得た。三十数年ぶりである。彼の獲ったという熊のあごの骨で造った印籠の根付が僕への心のこもった土産であった。そしてもう一度ぜひやってきてくれとのことだった。その機会をぜひ再現したい。

×

×

×

×

念願であった荒沢岳へも登ってみたい。あの辺の谷がダムで湖水になったとしても周囲の山々の姿は変わっていないだろう。そんな想いが後から後に尽きない。本書の評を頼まれて筆をとったのだが、自分の思い出や楽しみが先に立ってどうもその責を果しそこなったようだ。しかし本書によってまだあまりよく知られていない尾瀬周辺や、会津の落ついた日本的な山々の好きが、あらためて多くの登山者に紹介されることは間違いないであろう。

(一九六一、七、二八記)

△A5版、三九一頁、昭三六

五、二〇、修道社発行V



石井 鶴三

会員通信

—黒谷川を遡行—
春の丸山岳と会津朝日岳

小林 智明

丸山岳の頂上には花の頃が特に見事だそうですが、五月の山ですの花を見ることはかなえられませんでした。広い雪の頂上から見た山々の眺めはとても庄巻でありました。

庄巻などと云えるほどの場所にある頂上は、そうざらにないので、平ヶ岳、荒沢岳、魚沼ヶ岳、未丈ヶ岳、毛猛山、守門岳、御神楽岳、飯豊山、磐梯山、那須山群、荒海山、会津駒ヶ岳、燧岳と、こう並べただけでも想像がつくと思います。よく晴れていれば、米山とか、東北朝日とか、いろいろの山を「おや!」と云うふうに見つけることができ、飽くことを知らぬのではない

かと思っています。

この山地に精通しておられる会津坂下の会員小滝清次郎さんに、御教導や紹介をたくさんいただき、黒谷川入りの白沢部落佐藤家に泊ったのは五月二日。翌三日若主人の文章さんを案内に黒谷川入りをいたしました。

最後の部落である倉谷を過ぎて、福寿草と片栗の花が今しも盛りと咲き群れる斜面を通り過ぎると、川の両側には樹木が少なく、やや荒れた感じの山肌となり、右岸に開かれた林道を城郭朝日沢へ行く若衆や娘達と、後になり先になりして、雪融水の豊富な黒谷川を対岸に小幽沢、大幽沢と見送って一回も渡渉せずに行きました。大幽口の二、三百米上流で次郎兵衛橋と云うセメン橋を左岸へ渡り、広河原沢対岸の撫林で林道は終わりました。

このあたりより火奴山にかけてを高幽撫所と呼ぶそうで、撫をはじめ、桂、樺、サワグルミ等の大木が並ぶようになり、黒谷入は次第に豊かな林相となります。

林道が終わってからは踏跡程度で径はなく、だんだん多くなってくる残雪を踏み、捲いたり、沢ぞいに歩いたりして、崩ノ滝の見える所まで大した苦勞もせず左岸を行きました。崩ノ滝の下で雪橋を右

岸へ渡りまもなく岩幽へ着きました。五万の地図では崩ノ滝と岩幽の間は五百米くらいになっていますが、岩幽のすぐ下に崩ノ滝があります。

不思議なくらいの大きな岩が一つ、その左側の基部が開いて二十人くらいは泊れる黒谷川の岩幽の夜は、焚火を燃しあかし、小鳥の囀りに眼がさめて、溪谷の遡行にいちだんと野趣をそえてくれました。

西と東の実沢は、どちらが本流か判断に苦しみどころですが、西実沢をつめて高幽山と不動沢の頭（一七七九米）峰との鞍部へ上りました。広い銀山平を俯瞰しながら高幽山を往復、それから雪稜つたいに丸山岳までたどりました。

丸山岳の頂では越後より吹いてくる風が強く、北側の斜面に風をよけて山上の憩いを楽しんだ後、大幽沢の雪渓を奥の二俣の近くまで降って露営。夜中に何回も雨が降り、雪上の火床はだんだん深く大きな洞となって火が消え消えになり寒い夜でした。

翌五日、いったん二俣まで降り、北に這い上る大幽朝日沢の雪渓を登りました。朝のうちは陽が照り、あちこちに満開の山桜を美しく彩り、方々でブロックが落ちはじめの頃には急斜面を登り過ぎ

てお午近くに会津朝日岳の一角に立ちました。

この頃より雨となり、洗戸川より吹き上げる雨風と、ネズモチやナナカマドの稜線歩きで三角点までたどるうちにすっかり濡れ、三角点を過ぎてからは広い雪尾根と濃霧に何回もだまされてようよう赤倉沢を下降、沼沢入りの道に合した時ははや夕暮近くでありました。

デトマツト平までくると対岸に伐採かと思う飯場が見え、裸の人影が動くあたりから炊風呂の煙が一条たちのぼり、いやがうえにも風呂が恋しく、歩を早めて佐藤家へ急ぎ帰りました。（二六、五）

岩谷小谷と鏡平

坂倉 登喜子

雲の平の新しい小屋の始めての客として、迎えてくれた三俣蓮華小屋の伊藤正一氏は、私達をギリギリ庭園の真中の丘の上の、ぼつんと可愛いお城のような小屋に招き入れて、これまでの苦心談をしてくれた。

その話を良く聞いて見ると、殆ど完成していた小屋のはめ板が、今年行つて見ると雪のためにこわされて、とうとう営業ができなかったそうで、皆さんに申し訳ないと言っていた。（小屋は十月完成*）

第二二三回小集会記録

・南極観測隊
・ニュージランド親善隊

・ニュージランド交歓隊
（佐藤隊）
（宇田川隊）以上三隊歓迎会

▽日時 36年6月29日（木）

▽場所 永楽クラブ

（大手町、野村ビル内）

▽出席者氏名

・南極観測隊

鳥居鉄也、深瀬一男、村石幸彦

・ニュージランド親善隊

佐藤テル、後藤董子、川井耿子

田村協子

・ニュージランド交歓隊

宇田川允敏、谷口正彦、吉田栄夫、八島康

・浜野正男、川上隆、茶谷東海、

竹田吉文、山下一夫、吉田武志、

折井健一、杉本賢治、青木昇、村

尾金二、木村碩志、山口一孝、川

喜田二郎、藤島敏男、近藤茂吉、

交野武一、田辺主計、中沢真二、

三田幸夫、川崎隆章、今村正二、

高橋博、寺阪元雄、佐藤隆太郎、

渡辺公平、野口末延、石原憲治、

杉浦耀子、岡部みち子、関根吉郎、

佐藤久一朗、斎藤直一、瀬能重衛、

岡義雄、樋口一男、富井道子、中

山翠、並木睦枝、中村純二、太刀

川安彦、中島伊平、吉武正子、村

*予定)

小屋の片隅の小さな室で雲上の一夜を過ごした私達は、ちんぐるまのははけた花園と、黒部源流の山やまに囲まれながら、透明な光に満ちた雲の平のすみずみまで歩き、今年の目的の岩吉小谷へも、スイス庭園から直接下るヴァリエーショナルートを教えられ、小谷の秘境水晶池周辺も探訪することができたのは幸だった。

帰途鏡平の秘境を訪れたが、丁度この鏡平へ毎年絵を描きにこられる中村清太郎先生が、今年もテント生活をしておられたので、差入れを用意して訪ねて見ると、残念ながら奥の池へ写生に行かれて留守であった。

先生のテントのある付近で池に写る槍の姿を眺めながら、心静かに一週間の旅の最後のひとときを愉しみ、沢すちを蒲田の谷へ下った。帰ってから先生から次のような歌が添えられて便りがあつた。

奥山の池のみぎわに残りたる
獣のあとに朝日影さす。

◇イタリ山岳会から弔詞◇

ランタン・ヒマールにおける大阪府大遠征隊の森本隊長以下の遭難について、イタリ山岳会月報編集主任ベルトリオ氏から(六月三日付)弔詞が寄せられた。

グリンデルワルド便り

足立源一郎

△その一▽

シャモニーからツエルマット、そして当地まで来ました。いま桜や林檎の花盛りですが、先日一昼夜にわたって雪が降りました。

山はまだ全く冬のまです。大きなナダレが目前に落ちるのは壮観です。マルモットの姿も二度ほど見ました。鳥も多いようです。

グリンデルワルドも、いまでは大した観光地となつてしまつています。写真の左側がエミール・シトリの宿で、右側のがフランツの娘がやっている土産物屋です。村中車で一ぱいです。

(ルーム土曜会あて、ウエッターホルンの絵葉書に寄せて)

△その二▽

グリンデルワルドへ来て二度目の土曜日です。お元気な皆様の顔が見えるようです。何だかシトリの酒場へ行けば、皆様に逢えるような気さえします。このところ梅雨のような天気でくさつています。瑞西人達が好きなギルシェはカストリのような臭気があつて終戦時を回想させるので嫌です。

(六月三日、土曜会あて、アイガーのスケッチに寄せて)

奈良短信

陰地章

奈良県庁の人事異動で、去る四月一日付、奈良医大の事務局に勤務となり、未だ経験のない大学運営を担当していますが、新人のため公務に追われて、四、五月の二ヶ月は山行きは一度しか出来ず、少し寂しい思いをして居ります。

もう大體公務の概略が理解できるようにになりましたので、再び吉野群山を独歩することが可能となつてまいりました。

もう年輪的に無理な山行は大いに慎みたいと考えていますが、夏季休暇に入ると、大学の診療班が大台ヶ原山に入る予定であり、馴れた山であります。気分の良い学生と山生活ができることは嬉しいかぎりでございます。

ウエストン祭にはぜひ一度参加したいと思つていますが、本年は当日、奈良県体育大会に当り、山岳班は吉野路の山に一泊二日間入ることになっていました。

県岳連の理事をしております関係上、県大会に参加しなくては責任が果せず、ウエストン祭を惜しみつつ本年を見送つてしまわねばならなくなりました。

会長の日高先生が遠路、吉野群山(山上ヶ岳―大台ヶ原)縦走に

お越しいただきましたが、恰度五月三日は大学の教授会で、ご案内ができず、申し訳なく思つて居ります。

山岳会の先輩各位の如く、私も人間の品性を山で磨きたく希望いたして居りますが、今後とも御指導を特にお願ひ申し上げます。

大阪市大の森本隊長以下の事故ニュースを聞き、全く残念至極と思いつつ今日なお考えさせられています。

優秀な人物を失うことは社会的にも大きなマイナスであり、悲しい思いで一杯でございます。

ルームの皆様によろしく。

(三六、五、二五、折井あて、奈良医大事務局内、陰地章)

(二一五号訂正)

誤

正

1頁5段	三月十日*	三月三十日
2頁4段	返電の*	返電。
6頁3段	西川益男*	西川益生。
14頁1段	即報性*	速報性。
17頁2段	花を捧げ	花を捧げ

×

×

×

井米子、日高信六郎、広谷精啓、芳野越夫、浜中慶子、神原達、佐藤大吉、高橋進、加藤泰安

以上六十三名(順不同、敬称略)

▽日高会長の歓迎の辞、乾杯の後、各隊長より隊員紹介と興味ある行動報告があった。歓談の後、南極隊の16ミリとニュージランド佐藤隊のスライドが上映され、好評を博した。当日は豪雨下にも拘らず、盛会で、午後十時近く折井理事の閉会の辞によって散会。

(中島伊平記)

▽第二四回小集会

◇日時 八月十日(木)午後六時

◇場所 お茶の水体育協会議室

◇演題 ニュージランド親善隊報告

告

◇講師 佐藤テル、田村協子氏

◇出席者氏名

・大貫太市、佐藤隆太郎、竹内義夫、高木菊三郎、福田嘉四郎、本多紀元、山口京一、下条富弘、朝井一男、岡村治信、大貫菊子、水田健之輔、津田周二、広谷精啓、荒木正弘、竹村元作、荻野和夫、北原春子、野口末延、折井健一、神谷恭、村尾金二、高橋定昌、川上順子、桑田信道、今井嘉道、中島伊平、大道寺隆子、榊谷健裕、沼田徳次、北川陰、以上三十一名



図書紹介

石井 鶴三

「ノシヤック登頂」

昨年、秋、私は風呂場の横の空に小さな粗末な本小屋を建て、ヒマラヤ関係の本を全部そこへ移した。そしてその書棚の一段に、ヒマラヤ初登頂の本を並べてみた。戦後のものだけで、二十冊あまりある。そのうち四冊は日本隊である。そこへ又新しく一冊加わった。京大学士会の「ノシヤック登頂」。

×

この本を読んでまず第一に感じたのは、AACKの底力である。この厚みと幅を持った山岳会の活潑な働きを見ると、他の大学山岳部は何をボヤボヤしているかと言いたくなる。海外遠征に慣れているから万事ソツがない。まるで「ちよつとそこへ登って来た」といったような余裕綽々ぶり、しかもそれが七四九〇メートルの高峰の初登頂においてである。

隊長酒戸弥二郎氏の文章は淡々として味わい深く、少しも英雄ぶった所や悲壮がった所のないのはさすがAACKの将官級である。京大隊は偶然ポーランド隊と同じ峰をねらうことになったが、その両隊の間の交渉など実に爽やかで気持がいい。立派な日本隊の襟度を示したといつていいだろう。

×

岩坪五郎氏の登頂日記もユーモラスで余裕があつて、なかなか面白い。何しろたつた二人でルートを探し、荷物をあげ、頂上に立ったのだから偉いものである。さぞ苦しいこともあつただろうと思うが、そういう点を大げさに誇張しないのも、AACKの老成した伝統だろう。

もちろん山の難易にもよるが、「ノシヤック登頂」を読むと、やれサンソだの無電だの繩梯子だのと、そんなものが無ければヒマラヤの高峰に登れないような騒ぎをしている登山隊は、ちよつと肩すかしを食つたような感じを受けるだろう。決してノシヤックが易しかったのではなく、その登山隊が優秀だったのである。

(深田久弥)

18.5×26cm、七二頁、写真二七葉
地図付昭和三六、六、一〇、朝日新聞社発行、定価九〇〇円

アビ(悲劇と幸運の山)

江上 康 著

昨一九六〇年五月、同志社大学登山隊による西北ネパールのアビ(七一二メートル)登頂の紀行である。正式の報告書でなく、この計画の推進力となり、強引にこれを実現したのはこびにもつてゆき、しかも見事成功させた著者が、筆のおもむくままに書きしるしたものである。

それだけに、固くるしく、わくにはまったところは全くない、形破りのレポートである。ヒマラヤ登山の準備というものが、どんなにやっかいなものか、紙面ににじみ出しているし、そして、どんなにやっかいなものであつても、本当にやる気さえあるなら、かならず実現できるものであるということとをこの本は教えている。そういった点でも、これからヒマラヤの登山を志さそうという若い人々にぜひ一読をすすめたい。

内容は「アビ行の発端」「悲劇の足跡」「出発までの難関」「インド平原をゆく」「酒と犬と電報と」「酷熱の太陽・苦難のキャラバン」「インナー・ライン」「ピトラガルからアビ山麓まで」「ベース・キャンプ建設」「山では何かが動

ている」「残照にかがやく白雪のアビ」「頂上だ!」「帰らざる登頂者」の十三章にわかれている。特に本書の特色としてはいまいったように、その計画の発端からベース・キャンプ建設までに大半以上のページ数をついやして、その苦心をつづっている。

自由ほんばうに書きしるしている著者の、序文における深田さんの言葉をかりれば「いたずら小僧的な眼」でとらえた文章はまことに楽しく、しかもユーモラスで、登山隊の行動が生き生きととらえられている。そして全員がヒマラヤに未経験者であるにかかわらず、まことにスムーズに登頂をなしとげている。まことに見事な成果である。これまであまり、日本の登山界に知られていなかった西北ネパールについていろいろ最近の事情がづづられているのも大変興味深い。

なお、巻末に附録として、薬師義美氏編の「中央アジア、とくにヒマラヤにおける日本人の探検と登山小史」が付されている。本項は貴重な力作であり、本書の価値を一段と高めている。

(山崎安治)

昭和三十六年六月十日東京創元社発行、本文二四九頁、写真多数

◇雑誌(和書)合本◇

人	Vol. 141~146 (1960. 1~6)	東京中日新聞社
アルプ	Vol. 23~28 (1960. 1~6)	創文社
国立公園	Vol. 98~121 (1958. 1~1959. 12)	国立公園協会
気象	Vol. 1~31 (1957. 6~1959. 12)	気象協会

<36年度 図書委員>

深田久弥、小林義正、徳久球雄、加藤元一、大橋 晋

◇図書委員からお願い◇

図書の利用について、会員各位に多大のご迷惑をお掛けしておりますが、この度、管理に万全を期して名誉ばん回するべく、係一同整理に全力を尽しております。

秋には図書目録も作成できるものと考えています。

ついでには図書の充実を計るべくご寄贈願える図書がございましたら、ぜひルームへお寄せいただきたくお願いいたします。

また会にはぜひあるべき図書をご指示いただければ備えるようにしたいと思ひます。

(徳久)

「垂直と水平の道」

渡辺兵力・高木正孝 著

著者の渡辺、高木の両氏は、旧成蹊高校以来の名コンビであった。いまは東京と神戸に、戦前はベルリンと北京にと離れ離れの生活をしてきたが、たまに選えれば「オツ！」と言っただけで、なにを話しようということもなく意気投合し、あとはその辺を飲みあそばせそれで事足りる、という著者の言葉をかりれば「奇妙」な間柄である。と同時に両君の並々ならない人間的なつながりも、あり余る登山や探検の経験を通してさらに一層高められている。

×
いまでもそ岩登りの文字通りプレイグラウンドと化している一ノ倉の奥壁の最も初期の登攀者であった両君のクライミングの記述などは既に人の眼にふれる機会の少ない三十年近くも前のものであるだけに、大変興味の深いものであった。

×
著者の一人は東京での学業を了えるとすぐ独逸へ遊学して本場のアルプスでみっちり登山の修業をして、その上日本人としては珍らしいガイドの資格(Lehrtour)登山

指導者)までものにする。そうして戦後に帰国してからはヒマラヤや南米のパダゴニアへと山岳放浪の旅を続けるし、もう一人の著者は南極観測隊の主要なメンバーとして、基地の発見や建設に非凡な働きを残してくる。それらのことが、いろいろの題名のもとに語られていて読者を楽しませることが多い。

×
心理学専攻の学究である著者の一人は、登山家が、危険が明白なのにことさら困難な岩壁や氷壁を攻撃しようとするのは、最近の心理學理論からすれば、それは「欲求不満」よりくるのではないかということが考えられるが、なお今後の実証的研究をまたなければつきりしたことは言えない、と一応の問題を提起している。「山と人間」と題する一文は、初級から高級にいたる登山者のそれぞれの断面を著者独自の観察とメスによって解剖してみせている。

そのほか「クレヴァスの中」「南極圏紀行」「グリーンデルワルド物語」などスリルのあふれる好読物と言えよう。

(織内信彦)

創文社刊、昭和三十六年四月、二七九頁、三三〇円

わが愛する山々

深田久彌 著

重厚で、素朴で、まっすぐに柱目がおとって、深田さんという人は、ひのきのようだ。口が重くて、実意があって、茫洋として大きく、自足の境地で晴れやかに澄んでいること秋のようだ。その深田さんの近著「わが愛する山々」。いくらかむき出して正直すぎた題のようだが、厭味が無くてもそのものずばりの人柄にはびたりしている。

内容は私なんぞのほとんど知らない国内の山二十一座への登行記で、読んでまったくおもしろく、啓発されるどころかまた頗る多くて甚だ有益だった。山は本州のものが大半を占め、四国と九州で各一座、北海道で四座がかぞえられている。そしてそのいづれもが一般には名がくらしいか知られず、おそらくその半数でも登った人は稀だろうと著者は自負でなく書いているが、いかにも、揃いも揃って、夏霞のかたに、夕映えの果てにけむり、流行には至って遠い山ばかりである。

だから特別な愛をもって登られたこれらの山が、この著者だけに打ち明けた秘密の告白が美しいの

である。心を与えなくては心は獲られない。著者はいたる処で本心をぶちまけながら山の観想に徹している。私が啓発され益されたというのも、単に未知の山への知識についてばかりではないのである。

北陸なまりの深田さんは私のことをオサキサンと呼ぶ。そして濁らない「サ」が強音になる。だから「お咲さん」というように聴こえる。どこかの峯のぼんやりした大写しを背景に、そんな深田さんの目もと口もとが懐かしい。

(尾崎喜八)

四六判各項略図つき、二八三頁、三三〇円、昭和三十六年五月新潮社発行。(三六、六、一九、週刊読書人より転載)

山毛櫟叢書

(加藤武三著)

広島山の会刊行

第7集 広島をめぐるスキー場案内

(新書版一〇、三種×一八、五種)

前号二一五号で紹介した第1集・第6集に続いて第7集が刊行されている。(35年12月25日刊行)

内容は県下のみでなく山陰はもとより、因幡但馬境から、南は山口県下まで及んでいる。

五六頁、七〇円(F)

◆寄贈図書(和書)◆

36年1月~6月

日本山岳全集6
阿蘇
広島をめぐるスキー場案内
詩集此の糧
東南アジアの保健医療事情を見る
四国山岳夜話
登頂ヒマルチュリ
尾瀬と南会津
九州の山
垂直と水平の道

三三八治郎 哉功雄孝力
正武喜秀一 震数敏正兵
田藤崎谷川淳二 震数敏正兵
北加尾長北山西加立高渡

朋文堂
山毛櫟
二見書房
毎日新聞社
実業之日本社
しん山
創文社

海 1
登山技術
小倉大博覧会誌
アビ・非劇と幸運の山
会津の山々・尾瀬
ノシャク登頂
登山技術 2

正会 所康章学会
口山 役隆大岳会
日本 市上崎都山本
河本 小江川京学日

社 元社 新聞社
秋 創道 白水
春 東京 朝日
白 修 白

「山岳」第1年~第35年

第43年~第52年

日本山岳会

故沼井鉄太郎氏寄贈本(製本済)



大阪市立大学ヒマラヤ遠
征隊森本嘉一、大島健司、
及びガルツェン・ノルブ
三氏合同葬

日時、七月九日午後二時
場所、大阪市立大学講堂

本会弔詞

一九六一年五月十一日、雪崩のため、リルン氷河上に森本嘉一、大島健司、ガルツェン・ノルブの三君を失ったことは私どもの痛恨惜く能わないうところでありました。森本君が大阪市立大学の創立四十周年記念事業の一つとして行なわれた同大学山岳部のランタン・リルン登山隊の隊長たる責任を帯び、周到綿密なる計画と準備の下に、本年三月故国を出発、五名の隊員とガルツェン以下四名のシェルパと共に勇躍現地向かわれたことは、まだ私達の記憶に生々しく残っています。私達はその優秀な編成と装備から輝やかしい成功の知らせを首を長くして待っていたのであります。その矢先に遭難の報に接し暫くは信することも出来ないう状態でありました。

ヒマラヤに於ける遭難は、わが国の登山隊においては初めてであり、森本、大島両君はその最初の犠牲となられたのでありますが、遭難当時の模様を詳細に承るに及んで、私達は今後のヒマラヤ登山に対する幾多の教訓と示唆を得ることが出来ました。

まことに高価な犠牲と申し上げなければなりません。私達はこの高価な教訓を、慎重にかつ謙虚に検討し、最大限に活かすことによって貴君たちの払われた尊い犠牲を無為に終らせないように努力しなければならぬと存じます。

またガルツェン君がマナスルの登頂を初めとして、わが国のヒマラヤ登山家の卓越したシェルパとして活躍されたことは申し上げるまでもなく、唯にシェルパとしてだけでなく親しい私達の山仲間として多くの岳人から敬愛されていたことは申し上げるまでもありません。今や私達はこの盟友も永遠に失うに至ったのであります。生前の日本隊に尽された輝やかしい功績を想起し、ここに深甚なる弔意を表するものであります。三君よ、どうか安らかに永遠のヒマラヤの峯に眠って下さい。

昭和三十六年七月九日
社団法人日本山岳会

会長 日高信六郎

会務報告

六月理事・評議員会

一日・ルーム

佐藤久一朗



- ▽日高会長、理事渡辺、折井、川上、古沢、監事野口、評議員神谷、山崎、青木、織内、委任出席者、山崎、目下田、小原、藤島
- ▽議事と報告
- ①第十五回ウェストン祭について (折井)
- ②支部長会議について (同)
- ③支部長会議の通り。
- ④大阪大ヒマラヤ遠征隊遭難について (金坂)
- ・同大学では来年度もランタン・ヒマールに入りたいとのこと。本会としてはガルツェン未亡人にとりあえず一〇〇ルビーの香典を、OB泉隆次郎氏に委託したが、なお吾々の気持をあらわす意味の募金を内外に呼びかけて行いたい。
- ⑤ルーム移転について (折井)
- ・港区青山北町五丁目住宅公団

- アパート付ビルが出来るので、五月二十六日、会長、折井兩名が公団側に挨拶に行った。完成予定三十七年秋。これについて五百万円位の募金を行う必要あり。外部(会社関係等)にも働きかけたい。
- ⑥六月小集会について (川上)
- ⑦六月小集会の通り
- ⑧従来開かれなかった八月、三月、四月等にも会合をもつように考えたい。
- ⑨ガイドブックについて (渡辺)
- ・実業之日本社より北アルプス縦走コースのガイドブックを本会編として出す(夏山のみ) 定価一八〇円。
- ⑩日本山岳会医療連絡会について (田村)
- ・夏山診療所開設について、厚生省と薬品業者との間の斡旋役として標記連絡会をつくる。
- ・委員三名辰沼、武藤、田村、富士山研究所もこれに入る)
- ・医療連絡会の仕事は原則として理事会の可決をまつ。
- ⑪大室静岡支部長の送別会
- ・金坂理事出席
- ・大室氏は今般郷里の千葉県へ転居のため支部長を辞任。後任は未定。
- ⑫日本山岳協会(岳連側担当)による登山指導講習会について (田村)

- ・期日、七月十一日―十四日、場所、蒲田(岐阜県)
- ・本会から講師五名出席予定、東京から三名、信濃支部、関西支部からそれぞれ出席していただきたい。
- ⑬高校登山講習会について (徳久)
- ⑭東京オリンピック種目外選手強化補助金について (折井)
- ・体協よりオリンピック種目外として一〇〇万円程度補助金ある筈につき、事業計画を提出するよう連絡があった。
- ⑮各委員会について (同)
- ・ヒマラヤ委員会委員を再任。
- ・海外登山審議委員会委員に、松田雄一氏を加える。
- ・登山技術研究委員会の委員に、高橋進、田辺寿、片桐理一郎の三氏を加える。以上
- 七月理事会 六日・ルーム
- ▽日高会長、三田副会長、理事浜野、折井、渡辺、川上、村木、田村、目下田、高橋、徳久、中島、他に、初見、石取、平山
- ▽議事
- ①ルーム移転について (川上)
- ・場所、港区青山北町五ノ一七、名称、第一青山ビル合名会社(代表者中井卓次郎)。三階二〇坪―

大島健司君のこと

橋本信行

大島君は八人きょうだいの三番

目で、次男坊であったが、このきょうだいは揃って頭が良く朗らかな気質であった。その中でも彼は兄弟思いで人情味の豊かな人間であった。ぼくなどは現役時代に連日の如く彼の家に入り浸って山の計画を樹てたり、準備をしたりしていたので、よく御両親はじめ御家族の方を存じているが、こんな気持のよい家庭は外に知らなかった。この様な家庭で育まれた彼のすぐれた性質はリーダーであった彼の活動を通じて、当時の山岳部の連中に浸透して、クラブはいくつも和気藹々として本当に楽しかった。

彼は裸になると筋骨隆々とした偉丈夫だったが、顔が小さくベビークエースだったので、眼鏡をかけてにこにこ笑った感じは柔和そのものであった。しかし彼のフェイスは見かけとはるかにかけはなれていた。二年生のとき、彼は雪道で滑ったフレッシユマンをひきとめようとして止まらず、二人とも雪がちらついているというのに三十米程下の薄氷のはった滝壺へざぶんと落ちたことがあった。

三年生のとき前穂北尾根三峰のとつてスリッパしてナイロンザイルが切れ三十米下の谷に落ち深々と積った新雪のなかへ埋まり込んでしまったこともあった。

この様な危険に彼は何度も遇ったが、彼のフェイスと山への情熱はますます強固なものとなっていた。ぼくには彼が不死身のように思えた。今度のヒマラヤ遠征でも、たとえ他の人が遭難しても彼だけはどんなことがあっても帰ってくると思っていた。

この考えは葬式のすんだ今となってもぼくの頭からはなれず、彼が死んだとはとうてい信じられな

い。「ほんまにしんどかった。」

といいつつひょっこりぼくの目の前に現われそうなきがしてならない。人から「お前は太島が死んでいつ泣いた」と聞かれたが、実感の伴わない彼の死に涙の出ようもない。その時ぼくは、「きつとリルン氷河の麓にある彼の墓の前に立った時、その時は泣くかもしれない。」と答えた。

(三六、七、三)



二三坪位、保証金坪当り五万円、

家賃坪一、八〇〇円、公益金月

二、〇〇〇円。期間、山岳会が解

除されるまで、解除の場合は六ヶ

月前に連絡のこと。地下倉庫五

坪。暖房あり。保証金は分割払い

で契約時に1/3、残り2/3はその後の

半年以内位でよい。入居可能。来

年十一月から。

契約は今年の末頃、公団としては出

来る限りの協力をして呉れる。

②上高地山小屋について(折井)

・七月四日の豪雨により大破、今

後現場をよく調査して対策をたて

る。

・大室静岡支部長辞任について

(金坂)

・後任選定問題に協力したい。

④ガルツェン弔慰金、募金につい

て(村木)

・会長、副会長、ヒマラヤ委員会

を中心にして募金活動を行う。

(植名答委員を發起人代表として別

に委員会を設け募金を行う)

⑤読売新聞社主催「夏の立山大集

会」について(折井)

・本会としては参加しない。

⑥全国帆布製品工業会申請の登山

用テントの規格について(折井)

・本会として認めるか認めないか

は、業者のテスト実施の結果をみ

てからにしたい。

⑦運動具の物品税撤廃に関する陳

情書について(折井)

・山岳会として協力したい。(天

幕、スキースケート用品)

⑧図書委員会報告(徳久)

顧問、深田久弥、小林義正。実

務、大橋晋、加藤元一。洋書、和

書ともに整理したい。

⑨日本山岳協会登山講習会(岳連

側担当)について(田村)

・七月十一日―十四日、本会から

日高会長、田村理事が出席。

⑩富士山頂高山医学研究所に対

し、毎日新聞社から二万円の寄附

があった。(田村)

⑪本会主催、高校登山講習会につ

いて(徳久)

・場所、立山周辺、期日、八月十

七日―二十一日まで。講義を中心

として行う。

・チーフリーダー浜野正男

・サブリーダー高橋進、片桐理一

郎。事務局(徳久球雄他)

・講師、日高会長、三田副会長、

榎有恒、加藤泰安、金坂一郎、村

木潤次郎。

⑫北大ヒマラヤ遠征計画について

・ガンデエロバ・ヒマール

・隊長中野、副隊長岡本他五名。

協力依頼と説明があった。

⑬日大ヒマラヤ遠征計画について

・ムクト・ヒマール

・隊長石坂以下三名。協力依頼と

説明とがあった。以上

会国支部長会議

▽期日、七月八日(土)

▽場所、白樺山荘(代々木初台)

▽出席者、北川宮城支部長、藤島

越後支部長、津田関西支部長、中

田富山支部長、高山信濃支部長、

大賀寿二(関西支部委員)

日高会長、三田副会長、理事渡辺、

浜野、折井、川上、金坂、中島、

監事野口、評議員望月、神谷、深

田、織内、篠田、以上二〇名

▽各支部長報告

○高山信濃支部長——信濃支部で

は現在岳連のことで種々問題が起

っている。支部と古原氏を中心と

する岳連と、新たに名のりをあげ

た信濃山の会とが、七月十七日に

懇談会をもち、結局、長野県山岳

協会というかたちで出発すること

になると思う。しかし従来の経過

から考えて、団体予選と日本山岳

会で行う登山技術指導者講習会と

は支部が担当する。

○藤島越後支部長——会費値上げ

について、考えてもらいたいこと

は、現在、本会支部はいくつあり、

各支部はそれぞれ何県を含み、支

部所属会員数は何名であるかとい

うこと、並びにその会費納入状況

はどうかということ、ざっくりば

らんに発表してもらいたい。

○藤島同支部長——現在のように支部と岳連の意見とがとく一致を欠く現状下にあつては、日本山岳会は支部をも含めて、本来の姿にかえることに賛成、一唯その場合クラブの活動以外に支部はなにをやたらよいか。

○理事浜野、折井、金坂——日本山岳会は本来の姿にもどしつつ、日本山岳協会の業務分担（日本山岳会は海外遠征と登山の技術指導、全岳連は登山の啓蒙と団体運営）に従って行動しているのも、もし支部から登山の技術指導、講習会の要求でもあれば積極的に援助したい。

○藤島越後支部長——「山岳」にはヒマラヤ関係の記事が多く、国内のものも少ない。もっと国内関係のものをも入れるように。

○深田評議員——図書委員として本年度は図書の整理方法を変え、また貸出しもするようにしたい。支部に対しても。

○藤島越後支部長——会員名簿を別別にしていただきたい。

○理事浜野——従来の名簿形式に加えて都、道、府、県別索引を作るようにしたい。

○高山信濃支部長——入会届、会費は必ず支部を通すようにしていただきたい。

○理事折井——会費滞納者は三年

間保留、それ以上は除名にでもしないと整理がつかない。（海外居住者については別に考慮したい）

○津田関西支部長——関西支部の地域は古い支部規程によると、滋賀、京都、兵庫、大阪、和歌山、奈良となっている。

○日高会長——支部はお互いに集まりたいという意志で自然にできたものであり、新しい会員がどの支部に入るかということは画一的にはいかなければならない。結局本人の意志にまかせる。

○津田関西支部長——関西支部では評議員二十数名をおく（関西支部評議員会）。これは支部および会に功労のあった人をあてる。

○中田富山支部長——支部長会を年二回くらい開いてほしい。

▽本部より

△会費値上げについて

（折井常務理事）

*通信費の値上りや、「山岳」一冊で原価五百円位かかる現状からして、会費、入会金の値上げをお願いしたい。

（多数の意見あり、その結果——）
*入会金三、〇〇〇円
*会費年額一、八〇〇円（そのうち四〇〇円は各支部に戻し、山日記の無料配布が望ましい）。

*右値上げについては各支部長の原則的諒承を得たので、さらに検討を加えたい。一同承認。

△大室静岡支部長辞任について（金坂理事）

*大室貞一郎氏、千葉市転居にもない、後任支部長選任については、目下同支部内において意見の調整につとめている。

△上高地山小屋について（高山支部長・折井常務理事）

*上高地案内人組合の小屋を一七〇万円で飯田屋—営林署との話し合いも済み譲渡完了したが、七月四日の豪雨で大破（使用不可能の模様）したので、換地を営林署と交渉する。会としての具体的方針は現状を見た上で考えたい。（同小屋の敷地は営林署の所有）

△高校登山講習会について（川上常務理事）

*八月十七日—二十一日まで立山で高校の先生を対象として登山講習会を行う。

以上の他多数の意見あり、午後八時終了した。

*なお、篠田軍治氏はピーク29遠征から帰国、ご多忙中にもかかわらず出席され、あいさつがあった。

東京支部報告

夏山相談所を終って

六月下旬から七月中旬にかけて高島屋及び銀座松坂屋に於て、夏山相談所を開設した。何と言っても北アルプス方面の相談が一番多く、次が後立山、立山、南アルプス、八ヶ岳等の順である。中でも東北の山への相談も多くなってきたことはよろこばしいことである。

その他天候、装備、山小屋等の相談も例年より多く、皆真面目な態度であった。遭難対策の一助としても、こうしたP・Rこそ大切なものと思う。

なお、ご多忙中、ご協力をお願いした皆様に、厚く感謝いたします。（安彦六郎）

夏山相談所統計(1)

日別件数					10日間(30人)				
日	七曜	天候	件数		日	七曜	天候	件数	
6月27日	火	台風雨	37		7月2日	日	晴曇	58	
28日	水	"	13		3日	月	曇	28	
29日	木	"	39		4日	火	火水木	23	
30日	金	"	24		5日	水	"	42	
7月1日	土	晴	59		6日	木	"	40	
計				363					

1. 1日平均 36.3 件
2. 講師1人平均 12.1 件 1日7時間と見て1時間に1.73件
3. 講師3人として1時間に5.19件

夏山相談所統計(2)

場所別件数										日本橋・高島屋(6月27日～7月6日)										場所別件数										銀座・松坂屋(7月10～16日)																													
北アルプス	93	秩	父	7	朝	日	連	峯	1	天	装	候	7	北アルプス	79	秩	父	8	浅	間	山	1	北アルプス	79	秩	父	8	浅	間	山	1																												
後立山	49	日	光	5	魚	沼	三	山	1	立	立	立	24	立	山	42	谷	川	6	魚	沼	三	山	立	山	42	谷	川	6	魚	沼	三	山	1																									
南アルプス	32	吾	妻	5	大	白	峯	山	1	小	屋	其	他	後立山	44	日	光	7	鳥	海	山	1	南アルプス	38	朝	日	連	峰	2	那	須	1	南アルプス	38	朝	日	連	峰	2	那	須	1																	
八ヶ岳	25	中	央	4	八	幡	山	1	白	幡	幡	幡	幡	八ヶ岳	23	朝	日	連	峰	2	大	賀	山	八ヶ岳	23	朝	日	連	峰	2	大	賀	山	1																									
立山	22	志	賀	4	八	幡	山	1	妙	丹	丹	丹	丹	立山	22	飯	豊	山	2	加	賀	山	立山	22	飯	豊	山	2	加	賀	山	1																											
尾瀬	17	飯	豊	4	妙	丹	高	1	丹	沢	沢	沢	沢	尾瀬	13	飯	志	賀	3	入	笠	山	尾瀬	13	飯	志	賀	3	入	笠	山	1																											
霧ヶ峰	15	黒	有	3	戸	隠	沢	1	戸	隠	隠	隠	隠	霧ヶ峰	12	ガ	美	南	2			霧ヶ峰	12	ガ	美	南	2																																
富士	11	有	峯	2	戸	登	山	1	九	登	登	登	登	富士	11	富	美	南	2			富士	11	富	美	南	2																																
雲	10	那	須	2	九	重	山	1	九	重	重	重	重	雲	10	富	美	南	2			雲	10	富	美	南	2																																
谷川	10	草	津	2	九	重	山	1	九	重	重	重	重	谷川	10	草	津	2				谷川	10	草	津	2																																	
										計										363																				計										327									

<付 記>

銀座松坂屋では、1日2名の講師をと言う申込みでしたから、その通り計画したのですが、実際には山岳会で計画、依頼した講師以外にも担当者について、1日のメンバーが3名~4名と不定であり、そのため確実な統計をとることが困難でした。次回に行なう機会があったら、主催者側とよく打合わせからやりたいと思います。（安彦）

東海支部報告

さる六月十九日、東海支部では同志社大学山岳会東海支部と共催にて、大阪よりアビ遠征隊々長津田康祐氏を招き、アビ登頂報告会を開催した。

当夜は、名古屋市の中心部にあたる中区役所ホールで行なった故か、会員をはじめ一般の聴衆も多く、会場五百の椅子では足りず、立っている人もいたほどの盛況であった。

講演はスライドをまじえ、津田氏の解りやすく、ユーモアのある話し振りに、皆熱心に聴講することができた。ことに在りし日のガルツェン氏の活躍、またインドとネパールのインナーラインについて詳しく話され、良い参考となった。

講演終了後、福原健司氏の映画「山行」を上映し、報告会を終了した。
(中世古隆司記)



斎藤健治氏 提供

帰国ごあいさつ

拝啓 今回のヒマラヤ、ピーク二十九峰遠征に關しましては多大の御援助を賜わり厚くお礼申し上げます。

おかげをもちまして、尾藤、小秋元隊員と共に六月二十六日無事帰国致しました。住吉副隊長以下五隊員は船便にて七月下旬帰国致す予定であります。

遠征中私の病氣等によりまして色々御心配をおかけ致しましたことを深くお詫び申し上げます。幸い私もその後回復に向っており、隊員一同も元気でおりますから御安心下さい。ピーク二十九峰の登頂に成功は致しませんでした、西面の踏査を完了することができ、登頂のための充分な資料を得て参りました。

本来ならば参上致しお礼申し上げますが、取敢えず書面をもちましてお礼かたがたごあいさつ申し上げます。 敬具

昭和三十六年七月十五日

大阪大学山岳会

ヒマラヤ遠征隊長

篠田 軍治

×

×

×

×

★ 皆様よろしくご芳声下さいまし。

(昭 36. 6. 16. 会長, 副会長あて)

× × ×

御祝電を有難うございました。

皆元気で 28 日にリマに戻りました。お土産話は沢山あります。リマでも三浦大使はじめ多くの在留邦人の方々が喜んで下さってご馳走せめです。

明日からまたボリビア行です。皆様よろしく。

(昭 36. 7. 3. 本会あて)

○

アンデス・ワスカラン峰登頂

関西学院大学ペルーアンデス探険隊

副隊長 藤木高嶺

私たち関西学院大学ペルー・アンデス遠征隊も、第 1 目標のペルー・アンデス最高峰、ワスカランの南北両峰の登頂に成功いたしました。これも会長はじめ日本山岳会のご援助のおかげと感謝して居ります。

マンコスから見ましたワスカラン峰はコルデイエラ・ブランカ山群中、一きわ大きく遙かに高くそびえ威圧される思いでしたが、日に日にその険しさを知らされました。亜熱帯の水河特有の日中 49°C から、夜間 -25°C の開きの大きさはケタはずれで、しかも日に日に崩れ、変動して行くさまは、ヒマラヤ以上ではないかと思いました。

× × ×

数年前メキシコ隊が下山の際、クレパスのため 15 日間閉じこめられ、ヘリコプターが出勤してルートを開拓したということペルー山岳会に聞きましたが、なるほど驚きました。そのため高所キャンプの偵察には延 12 人、4 日間を要しました。

× × ×

三回の登頂に失敗しましたが、6 月 9 日、私と西村隊員が北峰 (6,655 m) を、6 月 11 日、田中、小川両隊員が南峰 (6,768 m) を、登頂しました。悪戦苦闘で、最高所キャンプから往復 15 時間要し、ビバーク寸前でした。

ヒマラヤでの遭難ニュースを聞き、慎重に行動しました。

× × ×

船の長旅 (47 日間) でやってきた隊員たちが、海拔 0 米からいきなり 6,800 m に登るための高度順応にはチーフ・リーダーの私は頭を痛めました。

つるべ式に B・C から C I, C II へと人員配置を交替させ、休養させ、そのたびに携帯無電が大活躍でした。高山病にやられた隊員も 3 人ほど出ました。

ワラスで、<ハボネスなんかにワスカランに登れるもんか>と言われただけに大きな顔をして下山できます。

会の皆様にもよろしく。

以下簡単に日程を記しておきます。

× × ×

5 月 25 日 リマ出発、5 月 27 日 B・C 設置、

5 月 30 日 C I 設置、6 月 5 日 ワスカラン南峰と北峰の間に C II を設置。

6 月 9 日 藤木、西村は北峰に、6 月 11 日 田中、小川は南峰に、それぞれ日本人として最初の登頂に成功。

今後の予定は 6 月 20 日ごろリマに帰着、数日後コヨリティ山群へ約 2 月の予定で出発いたします。

(昭 36. 6. 13. 会長ならびに会あて)

コヨリティ峰・カイヤンガテ峰初登頂

(同) 藤木高嶺

私たち最後の目標、カイヤンガテ II 峯 (5.93 1m)、III 峯 (5.969 m)、マイナスピーク (5.885 m) の初登頂に成功して無事、クスコ市に昨 5 日引上げて来ました。ワスカランでのスペイン隊の事故や、ドイツ隊の遭難事故を耳にして私達がワスカラン峰の登頂を先に無事にすましたことに今さらながら幸運を感じます。

コヨリティ山群は 7 月 1 日から 10 日間入りましたが、スペイン隊が先に初登頂していたので、そのシュブールを利用して短時日に、コヨリティ峰、アヤカチ山群の第 I、II、III、IV 峰、コルケブンコ峰を登りました。

つづいてカイヤンガテに入りましたが、これは当初の目標ではなく、見るだけでもというつもりでしたが隊員のネバリがものを言つて成功しました。ドイツ、アメリカ隊はさぞ残念がると思います。全隊員リマに戻り 9 月上旬の配船で帰国、私は一足先、9 月中旬羽田着の予定です。

(昭 36, 8, 6, 会長あて, 抄録)

ガルツェン遭難援助資金募集についてお願い

謹啓 盛夏の候いよいよ御清祥のこととお慶び申し上げます。

陳者 既に御高承の如く本年初夏、大阪市立大学登山隊がランタンリルン登山中、去る五月十一日未明第三キャンプを襲った雪崩のため隊長森本嘉一、隊員大島健司、サード、ガルツェン・ノルブの三君が遭難死されましたことは痛恨にたえないことであります。三君の霊に対しましてそれぞれの御遺族に深く哀悼の意を表したく存じますが、ここに最近届きましたガルツェン未亡人からの便りによりまして、同君にはかつて同夫妻に伴われて来日しました長男ラクバ・ノルブ (五才)、昨秋デオチバ隊 (細川隊長による日本婦人登山隊) に父君と同行した長女ニマ・ラモ (十七才) のほかに三才と一才の幼い遺児があり一家の支柱を失った今日今後の養育について思案にくれて居る様子であります。

同君の死を知つて以来、私たちは、同君が数々のわが国登山隊に尽された功績と、また生前、遺児の将来について常に心労していたことなどを思い併せてその温厚誠実な山の友の霊を慰めたく考えておりましたが、ここに日本山岳会内にガルツェン遭難援助委員会を設け、広く厚知各位の御同情をお願いいたしましたの援助資金を募集いたしますことになりました。

ペルー・アンデス通信(2)

一橋ヒルカ(一橋大)と



ワスカラン・カイヤンガテ (関学)ー

コルディエラ・ブランカ・ブカヒルカ北峰登頂

一橋大学アンデス遠征隊長 吉沢一郎

B・C (4,000 m) にて、

どうやら登頂の興奮から少し落着いて参りました。

イタリー隊はディオニシーを隊長に、ピアツを副隊長としてやはりブカヒルカに向いましたが、彼等は中央峰でした。昨年ベルガモ隊(隊長ブルーノ・ベルレンディス)が攻撃して失敗した山です。われらの登頂隊員が北峰の頂上から見おろしたところ、中央峰は 6,000 m ないのではないかという観測でした。遙かに低いのです。

それでもその困難さにおいては北峰に比し勝るとも劣らないものと思います。彼等はこの山に5月26日に登ったということが風の便りで耳に入りました。

われわれの Correo (ポストランナー) が丁度彼等のベース・キャンプ Taullipampa を通った時、手紙を托されました。“日本隊の健康と健闘を祈る”とスペイン語で書いてありました。私もまた、これに対し丁寧な返事を送りました。

中央峰と北峰とにわかれて攻撃したことは本当によかったと思います。彼等は波長 5 m の短波で連絡しているようですが、途中大きな岩尾根や氷河があるのでこちらには入りません。

B・C に入ったのが5月31日、午後2時半、それから12日目に第一登隊が頂上を踏んだのですから、われわれも驚いています。しかも登はん隊員の中で氷河の経験者は一人もいなかったのです。5,750 m の高度におけるビバークも相当なものであったようです。

私もダバに鞭打ち、5,150 m の C2 にあしかけ三日おりました。勿論氷河の棚の上で、アメリカのクリンチ等の登った Stanford Peak (6,010 m) (吾々の命名) や、☆

☆それから出る龐大な岩稜、北峰の巨塊、Ice Fall の流れ、氷の山の一応の姿は全部 C2 から観察できます。

生涯に一度は氷河の上を歩き、そして氷河の上で寝たいものだと思っていた願いが叶えられました。思えば3年にわたる全ゆる苦労がここに結実したわけであります。それもこれもみな、会の皆様のおかげです。有難うございました。

次に会報のために C3 (5,400 m) 以上の記録を述べておきましょう。

◎試登 甘利、中島、倉知

6月11日 C3 (7 a.m)ー氷棚ー(2 p.m)ーC3 (4 p.m)

◎第一登 中村、中川、中島

6月12日 C3 (5.40)ー氷棚 (9ー9.30)ークレバス手前 (10.30ー11.00)ークレバス通過完了 (3.00) (ここで4時間です、委細後に報告)ー雪原 (プラトー 3.15)ー主稜線 (4.45)ー頂上 (6,050 m) (6.15ー6.45)ービバーク (5,750 m 大クレバスの上 9 p.m)

6月13日 ビバーク発 (6.20)ー試登引返点氷棚 (9.30ー10.00) ここで第2登隊と会うーC3 (11.15)ーC2 へ。

◎第二登 甘利、丸山、倉知

6月13日 C3 (5.25)ー試登引返点 (7.30ー9.30)ー主稜線 (12.00ー12.30)ー頂上 (1.25ー3.50)ー主稜線 (4.15)ー第1隊ビバーク点 (4.30)ーC3 (6.50)

大体以上の通りです。第2隊の滞頂2時間というのは濃霧の晴れるのを待って写真をとるためでした。両隊とも天気には余り恵まれませんでした。写真には沢山とりました。

今年はブランカも余り天候はよくないようです。さっぱり安定していません。私達の防寒服も垢じみてきました。

私は C1 へ B・C から Gallina (鶏) を一羽持ち上げましたが、登頂前に殺すのは縁起が悪いと思い下へおろしました。ポーター頭の Emilio のいうには Gallina Blanca は Cordillera Blanca のシンボルだから殺さないでよかったといっていました。

今朝9時、エミ、パブロ、デメトリオの3人のポーター達が下りて来ました。

“Salud! (乾杯) Todos Miembros Buenos Alpinistas! En Huaraz, Muy Grande Fiesta, Salud!”

と言って真黒い顔をほころばせ、Cerbeza (ビール) の缶を高く上げていました。

★

の御援助を賜わらんことを切にお願い申し上げます。

なお勝手ながら募金の期限は十月末日といたしたく、御送金先は

東京都千代田区神田駿河台四ノ六

社団法人 日本山岳会ガルトツェン遺児

援助資金募集委員会

振替口座(東京) 四八二九番

又は三菱銀行丸の内支店 日本山岳会

ガルトツェン遺児援助資金募集委員会に

お願い申し上げます。

昭和三十六年八月三日

日本山岳会内ガルトツェン

遺児援助資金募集委員会

委員長 横 有恒

殿

編集後記

☆本号からカットを全部新しくしました。カットを提供して下さいました石井鶴三、上田哲農、川喜田壮太郎、佐藤久一朗の方々にお礼申し上げます。☆掲載に当っては敬称を略しました。

昭和三十六年八月二十五日発行

東京都千代田区

神田駿河台四ノ六

発行所 社団法人 日本山岳会

編集者 古 沢 肇

頒価二十円 電話神田(四)八五二番

振替口座東京四八二九番

印刷所 株式会社 技報堂